



最終日

夏季青森県高校野球大会最終日は28日、青森市のダイシンベースボールスタジアムで決勝を行い、青森山田が八学光星を8-5で下し、3年ぶりに夏の王者に返り咲いた。青森山田は中盤に一時勝ち越されたが、六回以降底力を発揮。2本塁打などで試合の流れを引き戻すと、継投した高橋主樹が相手打線を完璧に抑え込んだ。青森山田は8月9～11日に宮城県石巻市で行われる東北大会に出場する。(取材班)

【八学光星】打安点振球

石井	1	1	1	1	0	0
井田	1	1	1	1	1	0
中橋	3	0	0	0	1	1
山田	3	0	0	0	1	1
中松	3	0	0	0	1	1
森	3	0	0	0	1	1
中	4	1	0	0	1	0
澤	4	1	0	0	1	0
良	2	1	0	0	1	0
木	2	1	0	0	1	0
大	1	0	0	0	0	0
森	1	0	0	0	0	0
大	1	0	0	0	0	0
井	0	1	3	1	6	32
振	0	1	3	1	6	32
球	0	1	3	1	6	32

【青森山田】打安点振球

川原	4	2	0	0	1	0
松	2	1	0	0	0	0
高	1	1	2	0	0	0
高	4	0	0	1	0	0
八	4	2	2	0	0	1
平	4	4	3	3	0	0
野	4	4	3	3	0	0
田	4	4	1	0	0	0
小	4	4	1	0	0	0
山	3	0	0	0	1	1
新	3	0	0	0	1	1
井	2	1	0	1	1	1
大	0	0	1	8	32	127
森	0	0	1	8	32	127
大	0	0	1	8	32	127
井	4	0	0	1	8	32
振	4	0	0	1	8	32
球	4	0	0	1	8	32

決勝	八学光星	0	0	1	0	4	0	0	0	0	5
	青森山田	3	0	1	0	0	1	2	1	×	8

(光) 奈良、森木-中澤  
 (青) 小牟田、高橋-新井山  
 >本塁打 林田(光) 平野、小牟田(青)  
 >二塁打 石井、田中(光) 平野、小形、山村(青) >暴投 森木(光)  
 >試合時間 2時間24分  
 (球審-立花、塁審-福永、小松、小西)

【評】青森山田は1点を追う六回1死三塁で、高橋が同点の中前適時打。七回には平野、小牟田の2者連続ソロ本塁打で2点を追加した。八回は1死一、三塁から高橋がスクイズを決めて突き放した。投げては六回から継投した高橋が一人の走者も許さなかった。八学光星は五回に石井、田中の二塁打などで打者10人の猛攻で4点を挙げて一時勝ち越したが、六回以降は攻守とも精彩を欠いた。

【投手】打安点振球  
 手同 打安点振球失  
 奈良 3 15 4 2 2 2 4  
 森木 5 25 8 2 2 2 4  
 小牟田 5 26 6 3 6 5  
 高橋 4 12 0 4 0 0  
 初回、守備の乱れからピンチを招き、マウンドに集まる八学光星ナイン



# 光星 初回3失点重く 守備力に差、ミス悔やむ

「先にミスをした方が負け」と思っていた。中澤英明主将の言葉通り、八学光星は初回にミスが絡んで勝ち点3点が最後まで重くのしかかった。勝敗を分けたのは、守備のほろびからの失点。この試合で記録した3失策のうち一つが初回のバント処理の際の送球ミスだった。相手は無死一塁から、セオリー通りの送りバントを仕掛けてきた。冷静にアウトを一つ取りに行くはずだったが、捕球した先発の奈良龍飛は一塁に悪球。無死、一塁からの送りバントで、今度は一塁の中山巧巳からカバリの二塁手への送球が乱れ、満塁となり傷口が広がった。

ここから死球押し出しや内野安打などで3失点。奈良は「焦って簡単なミスをしてしまったのは勝てるはずがない。自分の責任で負けた」とがっかり。仲井宗基監督は「詰めの目が出た。全力疾走を徹底していた相手のプレッシャーが上手だったのかな」と厳しい表情を浮かべた。

一時はリードを奪い、流れが変わったかに見えたが、八回にも記録に表れない送球ミスが絡んでピンチを広げられ、相手の8点目につながった。2番手の森木光汰朗は2点差のままに抑えていたら、攻撃にもミスができたはず。自滅してしまったと悔やんだ。

無失策だった青森山田とは対照的な結末。中澤主将は「守備力の差を痛感した。序盤に流れを持っていかれたのが全て」と完敗を認めた。(上村公徳)

5回八学光星1死二、三塁、田中恵亮が右越え二塁打を放ち、走者2人がかえって4-4となる



# 光星5回猛攻一時逆転も

○…八学光星は五回、プロ注目の相手右腕を攻略した。長短4安打を浴びせ、制球の乱れに乗じて4点を奪い、一時は勝ち越した。無死一、二塁で、石井修二郎は外角のスライダーを右中間にはじき返し、2点目をなす適時二塁打を放った。「流れを引き寄せられたと思った」

## 林田3回ソロ反撃ののろし

○…八学光星は三回、2番林田龍雅が反撃ののろしを上げた。「直球が甘く入ったら振り抜く」。狙い通りの真ん中直球を一振りし、右翼芝生席に運んだ。足の速さを生かすために昨秋から左打者へ転向。粘り強くスイングを続けてきた成果を夏の大一番で発揮した。左打者となって初めての一発でもあった。「最初はフライだと思ったのに、みんなめっちゃ喜んでくれて、うれしくなった」仲間に抱き付かれて祝福を受けた林田は「チームに貢献できる選手になりたかったが、今大会もこれまでにいいところなかった。少しは力になれたかな」とうなずいた。



3回八学光星、2死から右越えにソロ本塁打を放ち、生還後に仲間と腕タッチする林田龍雅（右）





## 光星主砲大橋 快音なく

○…今大会3本塁打。活主砲・大橋匠吾だったが、2本で2打点だった相手4  
躍が期待された八学光星の 決勝は3打数無安打。長打 番と対照的な結果に「向こ

初回八学光星2死 塁大  
橋匠吾は三振に倒れる  
……………

うは4、5番の連打が出て  
いた。投手陣を揺るぎませ  
ず、悔しい」と責任感をしま  
せた。

初回は2死 一塁から三振  
に倒れ、「一本出たければ  
流れも変わったはず」。三  
回も三振し、好機を広げら  
れなかった。「低めのスラ  
イダーやフォークを見極め  
られず、甘く入った球を見  
逃してしまった」と肩を落  
とした。

昨年6月に腰を疲労骨折  
して半年間練習できなかった。  
今年5月にも腰を痛め、  
今大会は痛み止めを飲みな  
がらの出場だった。それで  
も、持ち前の長打力で準備  
勝に貢献。大橋は「大学で  
も野球がしたい。好投手を  
打てるように、もっと成長  
したい」と前を向いた。

### 総評

優勝しても、聖地への  
切符を手にはできない異例  
の夏。今回は新型コロナウイルス  
の感染の影響で甲子  
園大会、県大会が共に中止  
となり、代替大会という形  
での開催となったが、出場  
55チームの球児は例年と変  
わらぬドラマを繰り広げ  
た。最後は青森山田の3年

ぶりの優勝で熱闘の幕を閉  
じた。  
青森山田はプロ注目右腕  
の小牟田龍宝や高橋主審ら  
充実した投手陣と堅実な守  
備で頂点に駆け上がった。  
打線も試合を経験すること  
に調子を上げ、決勝では強  
打を誇る八学光星に打ち勝  
った。甲子園で戦いぶりが

# 堅守の青森山田 頂点

## 光星昨秋から大きく躍進

見られないのは残念だ。  
決勝で敗れた八学光星は  
決勝で3失策8失点だった  
ように、投手を含む守備力  
でライバルとの差があっ  
た。ただ、県大会初戦でコ  
ールド負けした昨秋から  
は大きく躍進した格好。勝  
ち進んでつれてチームの成  
長が見取れた。  
大会全体を振り返ると、  
昨秋の県大会上位校がほぼ  
順当に勝ち上がった。弘前  
地区勢は決勝に残れなかつ  
たものの、ベスト8には昨  
秋に地区予選敗退だった弘  
前美など5校が残り、地区  
のレベルの高さを見せつけ  
た。一万、十和田地区勢は  
2回戦までに姿を消してお  
り、秋以降の巻き返しが見  
まれよう。  
今回は日本高野連が定め  
た「1週間500球」の球  
数制限が青森県で適用され  
た初の大会。勝ち上がるこ  
とに調整日と休養日があつ  
たため、制限を超過した投  
手はいなかったが、準々決  
勝以降は局面に応じて申告  
敬遠を使うチームも見られ  
た。  
近年は、各チームが主戦  
以外にもしっかり投手を育  
成しているほか、相手打線  
の目先を変えるための継投  
策を取るチームがほとん  
ど。主戦1人だけに負担が  
かかるようなチームは減つ  
ており、投球制限による影  
響はなかったと言える。今  
秋以降も状況を注視した  
い。  
感染症の影響で原則無観  
客での開催となり、ファン  
にとっては物足りなかった  
かもしれない。来夏は聖地  
を目指した昨夏までのよう  
な大会と変わるよう、新型コ  
ロナの収束を願うばかり  
だ。  
(上村公徳)

